

海軍歷史

卷四卷五

貳

國立交通大學圖書館藏書



\*10012144\*

DI
2
11

D1  
2

海軍歴史卷之四

海軍傳習之中

目錄

軍艦ニ用ユル旗章

船舶旗章ノ布令

海軍諸規律ニ關スル和蘭艦將ノ意見

軍艦旗章ノ布令

昭和24年11月7日  
高宮篤氏  
寄贈  
公衆衛生院

DI  
2  
11

海軍歴史卷之四

海軍傳習之中

軍艦ニ用ユル旗章之事

嘉永甲寅年七月十一日閣老阿部伊勢守書付ヲ以テ令シテ云  
大船製造ニ付而ハ異國船ニ不紛様日本船印ハ白地日ノ丸  
幟相用候様被 仰出候且

公儀御船ハ白紺布交ノ吹貫帆中柱へ相立帆ノ儀ハ白地中  
黒ニ被 仰付候條諸家ニ於ても白帆ハ不相用遠方ニ而も  
見分り候帆印銘ノ勝手次第相用可申候尤帆印并其家ノ船  
印にて兼而書出置候様可被致候右ハ船ノ儀平常廻米其  
外運漕ニ相用候儀勝手次第ニ候得共出來候上ハ乗組人數

并海路運漕方等猶取調可被相伺候

按スルニ此令有司席上之考案實際ニ不適旗又吹貫ヲ立  
白帆ヲ中黒ニ染ム無用之費多クシテ益無之後我輩頗ニ  
其無益ヲ云テ終ニ改ム

旗章之令出ツルノ前後我カ政府蒸氣船請求ノ切ナルカ  
故ニ和蘭國之軍艦スームピングヲ以テ讓與ノ議成ル船  
將次官グハ―ピユス爰ニ到テ軍艦乗組之事并運轉之事  
且ツ國旗ノ輕忽ニスヘカヲサル儀ヲ陳述シ併セテ書簡  
ヲ呈ス

傳習教示方并軍艦記旗船將心附之儀申出候横文字和

解差上候儀申上候書付

荒尾石見守

和蘭國王より蒸氣船獻貢仕候付傳習受候者被遣候儀ニ御  
座候ハ、惣督者一船之指揮致船上之事共無殘心得居不申  
候而は不相成職務多端之趣ニ付相當之者貳人撰可被遣候  
段并乗組人數之儀ニ先便申上置候處此節右船御受納相成  
候段申達候ニ付教示方并軍艦記旗船將心附之義申出候書  
面カピタンより差出候間和解申付候處昨年同人渡來之節  
教示致し候義は唯大概耳ニ而當節ニ至候而ハ順序ニ立教  
示可仕就而は乗組人數立相定銘々手々分け別人交替不致  
様無之候而は修業速成不仕就中指揮役共可相成者ハ天文  
算學等研究致し船中諸般之事無殘心得居可申第一等士官

者右ニ差續候者ニ而同様諸事心得可罷在事共委細申立候  
趣此度傳習受候爲被遣候惣督初士官ニ可相成者御人撰之  
御見合ニも可相成且ハ右書面之趣惣督之者ニ御達相成當  
人義職務之大意兼而辨居候ハ、着崎之上教示受候心得ニ  
も可相成と奉存候軍艦記旗之儀者追々大船御製造有之候  
ニ付而は御當國之船印蒸氣船將へも申聞置候方可然旨昨  
年御沙汰御座候得共和蘭者勿論外國ニ而も承知致し居候  
由船將噂有之候間改而不申達候處此度船印之儀申出候ニ  
付而は昨年被 仰付候通御當國惣船印は白地日ノ丸幟相  
用

公儀御船は白紺布交吹貫帆中柱ニ相立帆ハ白地中黒御定  
之趣委細可申達處船將此度申出候外國軍艦記旗と振合違

居候故申達候ハ、必定異存可申出と存候當時船將も氣乘  
能出精教示致居不遠傳習受候者も可被遣折柄蒸氣船御受  
納相成候初發より右一儀ニ付万一論柄を生し彼之氣と挫  
候様之儀も有之候而は不宜候ニ付船印之儀者先其儘ニ差  
置様子見計追而談判仕候方可然奉存候右之趣永井岩之丞  
にも申談候處同意ニ付依之右和解四冊相添此段申上候尤  
横文字は追便宿次を以差上可申候此外傳教之蘭人士官滞  
崎中取扱振井一ヶ年給料之儀共追々申出候間取調猶追便  
可申上候以上

卯八月

荒尾石見守

記旗之儀ニ付船將次官ヨリ加比丹へ申出候書面和解

一 毎々書面並口上ヲ以テモ申述候ハ海軍御取立之爲日本御奉行所不取敢乗組之者御申付之儀肝要ニ有之候トノ義ニ候右ハスームピングニ於テ日々習熟致シ置候テ此後來着ノ船々へ御配付相成可申此乗組ヲ以テ日本海軍ノ基ト被成修行練磨可有之爲ニ候

一 猶又申立置候ハ教示之仕方如何様ニ規定相立可申トノ儀ニ候

一 國王之蒸氣船スームピング既ニ國帝之モノト相成御請取ニ相成候上ハ武器全備之蒸氣軍艦御所得ト相成今ヨリハ實ニ日本海軍ノ御備有之候右ニ付一昨日之書面ニテ教示方并乗組御申付方之義申立候未外ニモ申上ヘキ肝要之事有之候ヲ存付申候

一 右ニ付先一廉申述此書面之主意ヲ相達可申義ハ則日本記旗之義ニ有之候

一 世界中諸之國々ニ於テ各其國其外屬地軍勢海軍并商船等之記旗有之候ニ付外國人民平常尊敬イタシ候

一 記旗相建候軍艦若記旗無之或ハ不分明之記旗相建武備イタシ候船ニ出逢候節ハ逆妨イタシ海賊ニハ無之哉遂吟味候上奪取候規定ニ付右記旗ハ最肝要ノモノニ有之候

一 依之每船就中武備イタシ候船ハ記旗可有之事ニテ船之後方ニ引揚候旗ハ國旗ト相稱何レノ國民ニ屬シ候トノ儀ヲ示シ申候

一 軍艦ニ於テハ右後方ノ記旗ノ外ニ尙櫓之内一本ニ一箇之徴有之其船軍艦タル事并主役之位階ヲ示シ候右徴ハ毎モ

同様ニハ無之長旗或ハ將旗ニテ不斷檣ノ頂上ニ引揚有之候

一和蘭海軍用辨別記徴之繪圖致附屬候

一大檣之頂上ニ引揚有之候長旗ハ唯軍艦之徴ニテ商買船ハ右旗相用候義不相成事ニ候

一將旗ヲ大檣之頂上ニ引揚有之候ハ其船之指揮役アドミラルニハ無之乍併重キ將士ニテ其下知一艘ヨリ數多之船々ニ傳ヘ可申徴ニ有之候

一艦檣之頂上ニ引揚有之候國旗ハスコートベイナクト乗船ニテ數艘之酋長フラグオフシールノ徴ニ有之候

一表檣之頂上ニ國旗引揚有之候ハ其船ニフイースアドミラル罷在候徴ニ有之右ハスコートベイナクトヨリ高官之

フラグオフシール一手之大將ニ有之候

一大檣之頂上ニ有之候國旗ハ海軍極官ノフラグオフシールナルロイテナントアドミラル罷在候徴ニテ海軍一組之大將ニ有之候

一國帝或ハ國王之記旗ニ國王之紋アルヲ大檣之頂國旗之上ニ引揚タルハ其船ニ國主罷在ノ徴ニ有之候

一フラグオフシール船中ニ罷在其記旗一ツ之頂ニ引揚有之候節長旗ハ引揚無之候

一右之次第ニ付軍艦ニハ第一記旗要用ニ有之候其譯ハ右記旗ニテ何國之船ト申義尙檣之一本ニ建有之候旗ニテ其主役之位階ヲ徴候義ニ有之候

一洋中ニ於テ軍艦商船ニ出會候節ハ下賤ヨリ高位ニ對シ恭

敬之爲商船其記旗ヲ引揚禮儀ヲ盡シ候義ニ有之候

一若商船記旗ヲ建不申候節ハ軍艦襲ヒ候テ不苦候

一各外國ノ人乗組居候貳艘之軍艦洋中ニテ行會候節右一艘之方ヨリ記旗引揚候而モ外一艘ヨリ不相答時ハ兩國人平和ヲ破候徴トシテ石火矢之備ヲ立其船ニ近寄鬪戰之用意ヲ成シ記旗引揚不申謂ハレヲ糺明致候

一港内ニ繫居勤務ニ預リ候軍艦ハ其記旗ヲ朝引揚日ノ入ヲ限トシテ御申候

一港内ニ繫居記旗ヲ引揚又ハ御候節ハ武家之作法トシテ音樂ヲ奏シ或ハ太鼓ヲ打申候此時當番并小銃ヲ携候者ハ其銃ニテ禮義ノ手前ヲ致其記旗ヲ國民且國主ニ擬ヘ恭敬イタシ候義ニ有之候

一右ニ付諸國民共國旗ヲ極肝要ノモノトイタシ候義顯然ニ有之候

一帝國日本モ國旗有之候哉相知不申候

一未タ無其儀候ハ、日本國ニモ最早海軍備ニ可相成候ニ付國旗拵ニ相成候事至極肝要ト存候

一右之通ニ相成候へハ記旗ヲ拵へ或ハ變改イタシ候國ハ何レモ各判之證據書ヲ以テ外國政府ニ掛合候風儀ニ有之右ハ混雜ヲ防キ候爲ニ候

一右日本記旗之義相濟候上ハ引續キ帝國日本海軍士官並乗組之裝束之義ニ付可申述候

一右之柝々貴君無御心置日本政府之聽ニ達候様恭敬ヲ以テ御申立有之度存候



日本へ差越候指揮役

船將次官

グフアピユス

卯七月

和蘭蒸氣軍艦ヘデ一船將グフアピユスヨリ教授方之  
義甲比丹ヲ以テ差出候書翰和解

一昨年國王之蒸氣船スームビンダ三ヶ月之間長崎港へ滞船  
イタシ候砌帝國御奉行所並諸國ヨリ爲稽古被差遣候人々  
習熟イタシ候ト申義何共難申上有之候

一昨年之教示ハ全大概ヲ示候而已ニテ好事家ニ數多之珍物  
ヲ明解イタシ候様之義ニ有之候

一當節ニテハ日本御奉行所ニ於テ實ニ海軍御取立被成度思  
召既ニ右御發起ニ相成最早武器備付有之候蒸氣軍艦御入  
手相成申候依之日本國右船ヲ以テ御利益被得度候ハ、教  
授方之義誠實ニ御熟考有之度候

一前文申上候通昨年教示ハ唯大槩ヲ示候義ニ有之候間此節  
ニ至候テハ急度順序ヲ立教示被請度候尙右教示イタシ候  
ニハ熟達之者全ク夫而已ニ委任有之度事ニ候

一教示方順序立候ト申ハ軍船ニ於テ必用有之候諸掛々之者  
諸事相心得居候指揮役ヨリ始メ末々年若之者迄無欠闕差  
置候儀ニ有之候

一諸事相心得候指揮役ト申ハ其者義天文其外算學有之其進  
退之船不慮之患難有之候テ日本地方見離候トモ再ヒ一港

へ到ラシムル等之心得アル者ノ義ニ有之候

一日本船ニ於テ是迄ノ振合ニ船進退致候義當時ニ於テ決テ充分ト難致候

一蒸氣船殊更蒸氣軍艦ハ高價ノモノニ有之尙乘組總中之人命ハ大切ノモノニ有之候然ハ天氣風並ハ變易キモノニ候間軍船並乘組之人命未熟之者ニ委任イタシ候ハ至極大切之義ニ有之候

一其術未熟之者指揮イタシ候へハ毎々其船並乘組之者全ク損亡イタシ候義有之候

一天文學航海術熟達致候へハ右等之患難ヲ避ケ且ハ無異ニ航海イタシ候タメ第一之方便ニ有之候

一右學術之外指揮役義ハ其船迅速進退イタスへキ蒸氣機械

之義モ相心得且又其船攻守ノ爲ニ相成候砲術其外諸事上達イタシ居候義肝要ニ有之候

一指揮役ハ船中ニ有之候諸具用法相心得假令ハ櫓船具帆並碇等之用法相辨可申事一言ニ申候得ハ指揮役義ハ船中ニ有之モノ一トシテ相辨ヘサルモノ無之トノ義ニ有之候

一第一等士官ハ指揮役ニ相續キ候モノニテ同様諸事相心得罷在可申事ニテ候其故ハ指揮役病氣或ハ故障有之候節ハ指揮可致義ニテ第二之指揮役トモ可申者ニ有之候

一外士官之向モ各請持之事指揮イタシ尙天文測量ノ學ニ達シ且大砲並蒸氣機械之用法其外之事マテモ相心得罷在可申事ニ有之候

一良能之士官居候へハ下等士官水夫船兵ニ至ルマテ宜相成

モノニ有之候

一右之者共之外蒸氣船ニテハ機械方要用ニ有之右ハ機械取扱所修覆イタシ候爲ニ有之候機械方居不申候テハ蒸氣船無益ノモノニ有之候次ニ申述ヘクハ火焚方之義ニ有之候是亦練磨致ヘキ所業ニ有之候間火焚方ト相成候者宜修行可致事ニ有之候

一諸事昨年毎度申立置候當節ニ至候テハ諸事手ニ掛候時節ニ有之候右等之義ニ付既ニ用意致居候

一既ニ毎度申立置候通教示ヲ請利益被得度候ハ、此已後之教示ニ順序御立可有之候

一右ニ付日本御奉行所へ御進申候ハ直ニ諸掛之者左之通御申付有之度候是ハ日本最初之蒸氣船ニテ航海辨用致候爲

ニ有之候則指揮役壹人第一等士官壹人士官三人按針役壹人水夫頭壹人端舟運用方三人水夫五十人兵卒組頭壹人兵卒小頭壹人兵卒拾人太鼓方壹人大工壹人帆縫壹人器械掛三人火焚廿人右之外士官見習之者三四人ニ有之ヘク候

一日本奉行所ニ於テ日本人之内ヨリ右之人數御申付被成日ヤスームピングへ御遣シ役々之所業習熟爲致候様有之度候

一右之者共ハ何レモ公儀人へ御申付一應御申付ニ相成候上ハ決テ日々別人交替無之様有之度左様無之候テハ時日而已無益ニ相費ヘ候故ニ有之候

一諸家方ニハ蒸氣二艘滯在中傳習執心有之候ハ、門人之向ヘデ一船へ御遣可被成候左候ハ、昨年スームピングニテ

傳習有之候振合通ニ可致候

一日本國帝海軍御取立被成度トノ義ニ御座候得ハ乗組之義ハ御配慮之第一ニシテ重立候義ニ可有之候此段再應申上候船艦ハ金銀ヲ以テ可被求候得共乘込之義ハ左様ニ無之國人之内ヨリ乗組夫々之者取立候ニハ年月研究可有之義ニ候

一右等之義御思慮被成ス―ムピング乗組之義ニ付申上候通外船用乗組夫々之者早々御申付有之度尙ス―ムピング之乗組同様最初申付候者ハ交替不相成様有之度候

一日本奉行所ニ於テ私儀日本之御爲ニモ可相成義ト存申立候件々御用ニモ相成候ハ、一度ハ時節有之御國益ニ相成可申義ハ相違有之間敷存候

一右乗組之者練磨習熟之義ハ一体之基ニ有之御注文之船々當地渡來之節御用達可仕候

一右之通ニ御取計被成候ハ、日本海軍取立之御趣意相貫候様相成可申候右ニ付御勘考被成ヘキハ蘭學修行之義肝要ニ有之候其故ハ諸業之爲著述致有之候必用之書籍獨學研究イタシ候爲ニ有之候

一右一件之義ニ付其許御相談仕候通私存意之程日本奉行所へ申立候義無用之事トハ不被存候

於出島

船將次官

グフアピユス

千八百五十五年第七月廿六日(安政二年卯六月十三日)

於國王蒸氣船ゲ―デ船出島千八百五十五年第九月廿七日安政二年乙卯八月十七日

一和蘭國王獻貢之蒸氣船ス―ムピング日本政官被請取候得者近日中ふ日本軍船と相成可申然れハ我指揮ニ者無之日本指揮役之支配と相成可申候

一右船昨年當港滯在中之傳習並當節ゲ―デ於て許多之門人之向へ傳授いたし候儀且又長崎港ニ每々異國軍船渡來之儀よて軍船者如何ある物との大体者相分り斯高價之船を以所望之諸用相辨候ため右船毎も相應ニ取賄候よは規則こそ必用ニ有之候義顯然ニ候

一教示之外ふも軍船ニ携候儀者悉く秘密をも毎度申立候儀

ニ有之候教示異見ハ實よ日本之爲ニいたし候義よて其政府ニ於ても我と相談いたし候人々ふも漸く其志よ相成候儀と相見申候

一猶又執事いたし候者船中之用事相辨並軍船を以て諸用相達候爲よとの儀ニ有之候且又ス―ムピング船ハ是迄稱譽

を以て阿蘭陀國旗を世界の諸方に翻し候義よ有之候得共今又日本最初之指揮ふて新旗則日本國帝之記旗を翻し其稱譽を以て何までも一軍船と相成可申相祈候儀ニ有之候一其爲第一肝要といたし候義者相當之軍令有之下は上を尊敬し且は下知有之候ハ、早速夫に従ひ可申事ニ候軍船の指揮役は部下の船人ニ兼て規則を教示し其意志を勵己を敬從いたし候様取計候儀決而怠間敷事此爲には階級嚴威

義理廉直最肝要に有之候

一 刑戒を司り候は指揮役ニ限り可申候依而彼者へ前廣掛合不申候ては決して其儀取行申間敷事

一 乗組之者熟練いたし候得は軍船の指揮至而易く相成可申事

一 船人清淨に有之候様心掛可申候清淨なるは人躰之壯健研究觀樂の爲至而よきものニ有之候

一 船中も亦奇麗にいたし可申候日々天氣都合宜候ハ、内外とも掃除致し相濟候上可成丈ケ内手を乾し風入候様可致候

一 檣船具帆鐵錨鎖蒸氣機器同釜都而些少之物にも心を附可申候右は國帝之物にて彼者へ一躰相任有之候故に候依之

可相成は悉皆不損様心付可有之候

一 乗組中之着物之儀にも心付可申候右衣類ハ奇麗にして同様ニ可有之候右は船中之役儀に應し極通夫く相當に可有之との儀ニ候

一指揮役は部下の者共々與へ候飲食とも可相成は風味清潔

ニ調理し遣候様是又不絶心掛可申候依之煮物等は指揮役第一等士官當番之士官並接針役又ハ水夫頭一く最初相試不申候而ハ決而配分いたす間敷候

一 船中之作業訓練休足觀娛食事都而定限に可致候

一 平常相應之當番相立可申事船海上ニ有之節ハ士官壹人乗組之者半分以上段ニ居合候者必用の作業船の進退帆の上下大砲の諸用其外之爲ニ有之候因茲惣乗組を等分に區別い

たゞ是を「クワルティール」隊と名け則「ステニールポール」  
クワルティール」即右舷「バックポール」クワルティール」即左舷  
と相唱申候

一船一港に碇泊いたゞ候節は當番を相立置夜中迎も乗組の  
四分一則右「クワルティール」半分と士官一人は上段ニ罷出  
可申候右は不計風波起り候節今一錨を下ゞ又ハ船の安危  
に必用に有之候儀心掛可申候爲ニ候

一船碇泊之砌ハ各番夜中四時皇國にて交替可致事當番引繼  
相濟候上は唧筒を測り水船中に入來候哉否様ゞ見可申尙  
亦船中出火無之様制禁之場所に火又ハ燈火火烟は無之哉  
心掛可申事出火ハ最危きものに有之故に候

一夜ニ入候以前見調置可申候は出火用水銃工合宜候哉尙亦

大砲は直に用達いたゞ候哉どの儀ニ有之候

一軍船に於て夏中ハ朝五時皇國七時半時ニ引當有之候得共

候に冬中ハ半時早め朝六時皇國のに太鼓方太鼓を打鳴申

候是を「レフイル」起太鼓と相唱申候尙大砲を一放發可致事

是を「ワクトスコット」番と名つけ申候

一鐘夏中は朝五ツ時冬中は朝六時を打申候ハ、乗組之者呼

起され申候按針役又ハ水夫頭は諸所にて笛を吹呼廻申候

然ハ惣乗組之者寢床を立出直ニ夫を疊摺定場所ニ入付可

申事其後「ワスセン」手洗「カムメン」梳の指揮有之候得者各手洗

ゞ髮梳申候右は人躰に蚤虱等の患なからゞめんか爲に有

之候右相濟候上下等士官ハ支配の者を見調候上各奇麗ニ

有之候哉相改候爲に候其末料理人鐘打鳴ゞ候ハ、朝飯の

相圖ニ有之候

一右等之儀規則立候而亂次無之様致候爲には左之通次第相分ケ可申事

指揮役は船長部屋ニて壹人食事いたし候事

士官は何れも「ロシクル」士官部にて食事いたし候事

機械方并按針役又ハ水夫頭は各別所ニて食事之事

一此他乗組之者を數部ニ相分申候是を「バック」器と又ハ「タ

フル」卓食と名け申候各卓に下等士官壹人頭分として拾人宛

圓居いたし候右拾人之内壹人料理方より食物請取余人ニ

次送其後は都而再ひ取片付可申事右は各番日相立置取賄

候事

一各器各卓の頭分下等士官は常々部下十人之行儀並着物之

儀をも心付可申尙食事中作法ニ相叶候様可致事

一朝飯相濟候ハ、船中ハ勿論舷内外を掃除し鐵具銅器磨き

風取を引揚可申事

一船掃除相濟諸事夫々相整候上惣乗組之者衣類着用可致候

夏は諸事朝八時皇國五時冬ハ九時皇國五時迄取調可申候其上

調練式有之船卒ハ上段之後手ニ相進國旗引揚候得は小筒

調練いたし太鼓方ハ「ロツフル」曲名を打申候又同時に帆を解

き風を入れ最上次櫓の帆桁を引揚申候

一調練式有之候節ハ指揮役ニ知らせ申へく然れハ官服着用

いたし上段ニ立出候上第一等士官より同人に夜中無異に

有之萬事都合宜候段相届候事刑戒可然儀有之候ハ、其儀

取行可申事無事に候ハ、當番之船卒太鼓を爲打上段を廻



り其上退散いたし候事

一右訓練式之後半時皇國四半時相立見分有之候此時は乗組惣中

上段ニ立出各其場々即右舷之組は右舷ニ左舷之組ハ左

舷に何れも十人宛立置申候是又食事之節各器に頭分下等

士官とも拾人宛之振合ニ有之候皆々順序相整候上士官と

も乗組之者を逸々相改申候尤第一等士官之外ニ士官之向

船中に居合候ハ、其人別ニ應々數組ニ乗組を分別いたし

有之候此組は「フリエンエータイプ」衣類と相唱候

而則士官者其配下之者行儀並衣類ハ不及申都而必用之事

とも心配いたし遣候事

一士官之向は配下之者皆行儀宜相當に同様衣類着用いたし

候哉見改候上第一等士官ハ見分相濟候段知らせ申候然ハ

第一等士官再乗組之者之前を通り逸々見改其後萬事奇麗

ニ次第相整夫々の場所に有之候哉見廻申候

一其後第一等士官ハ指揮役之側ニ行き見分相濟候段申聞候

得は指揮役は訓練並晝中之諸用申付候是則大砲小砲劔術

帆前端舟運用最上櫓之上下深淺測量綱之解結等之訓練に

有之候

一第十一時皇國四半時晝前之訓練相濟申候然ハ帆ハ結付上段

を取片付掃除いたし申候第十二時皇國九時晝食有之候右

ハ一時皇國半時之間にて食事中は右場所に居物靜ニて行儀正

しくすへきなり食後早く何れも掃除し備付相濟候上第二

時皇國八時迄休息いたし其後又々訓練始り第四時半皇國七時

五皇國七時夕食有之候日輪沒候節

ハ船卒再ハ上段之後方へ來り小筒訓練愛に云訓練はブレ  
 也いたゝ太鼓方「ロツフル」名曲を打鳴ゝ國旗引下ケ端舟引揚  
 ケ最上次櫓の桁を引下ゝ候得は太鼓方臺場ニ於て「アツブ  
 ル」名曲打鳴ゝ申候此時何も夫々之場所へ來り候得は士官之  
 向は各其配下之者を見改尙大砲並夫々受持之者都而見分  
 いたゝ右相濟候段第一等士官へ相達ゝ若大砲並夫々受持  
 之者病氣にて出勤いたゝ難き者有之節は臺場外之者をも以  
 て助勤爲致可申候右は夜中臨時ニ臺場ニ相集り候儀有之  
 砌萬事相整壹人たりとも不足無之様之手當ニ有之候右等  
 之儀は軍船第一之儀にて晝夜とも不時合戦の用意可有之  
 候事

一月曜木曜兩日晝第三時皇國八時より第四時半皇國七時迄

ニ乗組之者着物洗濯いたゝ置日輪没ゝ候ニ至り引揚申候  
 一夕第七時半皇國七時合五夕皇國五時に乘組之釣床を其圍場より取出ゝ  
 掛置第八時皇國五時に至り當番之外寢床ニ到申候見守番は  
 夫々の場所ニ立出夜中之爲手分いたゝ太鼓方は「タムフト  
 ウ」名曲を打大砲ニて番發候ニ燈火火烟無之哉煮焚所之火  
 元宜候哉出火用水銃用意宜候哉夜中大風有之候節鐵錨を  
 入候ニ用意有之候哉若又燈火數多入用之節直ニ火燈ゝ候  
 爲燈籠ニ油相當ニ入れ有之候哉唧筒ニ水何程有之哉見守  
 番夫々之場所へ居候哉若暗夜ニ而地方見出ゝかたぐ且ハ  
 大風吹起り候節船押流され候哉測見候ため測深船用意有  
 之壹人其場所ニ居合候哉終に柁之進退に故障無之哉見届  
 申候此段第一等士官へ申達候得は此者より指揮役へ相届

申候所指揮役より第一等士官に書面よて夜中一体之指揮は相達申候

一下章ニ記し有之外は都而七曜之日ニ港湊碇泊中右之振合ニ取計候事

一月曜日晝前船中見分相濟候上「フリエニ」衣類有「パラ」テ之式有

之候則乗組惣中衣裳入を上段ニ持出通常之見分有之節之通居並自分くく之物を解出悉皆清淨にて其内破裂之者無

之段一く組頭士官ニ爲見申候

一毎月第一第三の月曜日ニは寢床掃除いたし候

一金曜日ニは船中奇麗ニ有之候ハ、仕事不致候然ハ乗組中着物取調又ハ何事ニよらず自分用相達且は寢所風通し等いたし候事

一土曜日ニハ船中心を付掃除いたし上段は砂にて磨き繪具等損し候所ハ新ニ彩色いたし候

一日曜日者休日ニ有之候事

一此日は指揮役船中並乗組ニ心を配り見改其後は乗組之中兩三輩親類見舞又ハ逍遙の爲め上陸爲致候事尙亦格別出精いたし候者並非番之者迄ハ上陸夜中居殘候儀をも差免候事

一軍船ニ於てハ日記を付可申候事各士官當番交代いたし候て右日記番中に有之候諸事并天氣風並如何有之候哉之儀書載致候上名判致候事

一指揮役儀就中能心掛可申儀は船中ニ於て諸事順序相立候哉之儀下段ニ有之候諸物折く相改候儀下ニ收有之候帆類

取出風入候儀石炭圍場之石炭濕氣無之哉之儀等ニ有之候  
 右石炭經驗いたし候には下段其外之圍場ニ折々長々鐵棹  
 を挿し暫時之間其儘召置候上ニ而引揚ケ暖氣有之候哉相  
 改可申事若暖氣有之候得は石炭暖り終には出火と相成候  
 徴ニ有之候尤石炭冷ニ有之候得は安氣之徴に有之候  
 一第一等士官ニ萬事取計之儀申付有之候得は士官之向ハ其  
 手附に有之候

一第一等士官は蒸氣部屋並石炭にも心を用ひ可申船港内に  
 碇泊いたし居候節は釜を掃除乾燥いたし候様車輪水中に  
 て錆さる様折々轉廻致し候様雨天には煙筒を覆候様天氣  
 宜候ハ、石炭圍場屢々風入候様尙又諸事殊更蒸氣部屋ニ  
 於てハ小事たりとも心掛可申事右は同人之役目に有之候

故に候

一第二等士官は大砲火藥其外武器等之諸事取扱候儀申付有  
 之候

一第三等士官諸船具端舟帆類鐵錨鎖諸綱具繪具等取扱方申  
 付有之候

一第四等士官は下段支配方之儀申付有之候此者儀は常々吞  
 水充分有之哉之儀且食物心配致候事實込人歟又は藏所よ  
 り食物差送候節ハ右請取候以前入念相改可申事尙亦時計  
 海圖書籍并大工入用之品取扱候事

一品立帳ニ有之候諸具損し候歟又は紛失いたし候ハ、其掛  
 り之士官儀は其品何處ニ有之何之用にて相損幾個程今ニ  
 相殘候儀人々承知致候様帳面ニ書記致候事士官ハ各其爲